

江戸幕府260年、泰平の礎を築く

伊賀八幡宮

宮司 齋藤 徳蔵



松平家・徳川家の氏神、伊賀八幡宮の境内には、今年もたくさんの蓮の花が咲きました。一年のうちほとんどが泥の池なのに、夏になると青々とした大きな葉と綺麗な大輪の花を咲かせる蓮。極楽浄土の象徴とされる蓮の花は、泥に咲く花として何がしかの意味があるように感じられるものです。伊賀八幡宮の境内整備がなされた江戸初期、三代将軍家光公が発したメッセージとは？ 時代背景と伊賀八幡宮のご由緒と係わりながら、お話をさせていただきます。

1. はじめに

風習。習わし。言い伝え。

……昔の手振り、親の手振りが伝承される。

子供がきく、“なぜ？”、“どうして？”

= 子供の習性といっいいい = 子供の好奇心

親がしてきたこと = 親の手振りを、子が真似る。

おはようございます。今、司会の森脇様の方からご紹介いただきました伊賀八幡宮の宮司の齋藤でございます。宜しくお願ひ致します。先程もお話いただきましたように天気にも恵まれて…。1年を通じまして雨だ、晴れだと言って人間が色々思うんですけれども、天気にも恵まれるということは本当に恵まれるという意味で喜びたいと思います。

岡崎学の関連でひとつ話をしてみろよとおっしゃっていただきました、お引き受けをしたのが今日の話でございました。岡崎大学懇話会が中心となって進めていただいております、この岡崎学。今年で5回目と5年目とお聞きしております。いつもは松坂屋の6階を会場にしていられる岡崎学、今日は伊賀八幡宮でお話させていただきたいということで、今日は会場をここに移させていただきました。まあ神様に相応しい、話をさせていただきたいと言う心ばかりは持っておるんですけれども、なかなか叶わないかと思っておりますのでお許しいただきたいと思ひます。

私も神主としてこうした縁に囲まれて、緑の木々から発する新鮮な空気と接する中で日々過ごしておるものですから、大学の先生やマスコミによく出る方々と違って、皆さんの前でこうやってお話しするのはあんまり慣れておりませんので。個々にお話しするのはしょっちゅうしておるんですけれども、こうやって皆さん大勢の方を前にして喋る

というのは慣れてないものですから、出来るだけ段取り良くお話をさせていただかなくてはと思っております。

たまたまですけれども、ちょうど10日前が満月だったんですね。それから10日後がちょうど冬至ですね。たまたまちょうど10日前の満月と10日後の冬至だなあなんて暦をめぐってましたら、じゃあ冬至のお話からさせてもらおうかなあなんていうことで用意をさせていただきました。

冬至になりますとカボチャを食べて柚子のお風呂に入る。今も、辛うじてと言ってしまうとかなり遠慮がちかもしれませんけれども、まだまだ続いていることだと思います。スーパーマーケットが宣伝してくださってるお蔭かもしれませんけれども、何とか続いていると思います。どうしてカボチャを食べるのか、どうして柚子のお風呂に入るのか。私もまだ子育ての現役の真っ最中でおございまして、よく子供が小さい頃お風呂に入って、「お父さん今日なんで柚子のお風呂？」とか、晩ご飯の時にカボチャを食べると「なんで」って。

「なんで？ なんで？」ってよく聞かれまして、うーんって。私も悪戦苦闘しましたことをつい昨日のように覚えております。上の子に喋った時と下の子に喋った時と違ひましてね。上の子が「あれ、お父さん、私そんなふうには聞かなかったよ」って言うんですね。「あっ、そうだったけなあ」なんて適当に誤魔化したりするんですけれどもね。なんだかんだ試行錯誤をしまして、子供だましの話をしてきたんですけれども、“はた”と気づきました。こんな屁理屈なんかいいんだと。お父さんのお父さんがやってきたからお父さんもやるのだよ。ああこれでもいいんだって、やっと気づきましたね。

現代いくら科学が進歩したからってそういうこと

とは別で、「親がやってきたことをお父さんもやるんだよ。お父さんがやってるんだからお前もいずれ大きくなったらやるんだよ」それでいいんだとやっ
と気づきましてね。そうなんだ。ここに書きました
様に風習とか習わしとか言い伝え。子供はとにかく
「なぜ、なぜ」と聞くのが仕事ですから、本当に親
が困っちゃうくらい聞いてくるんですけども、だ
けどその子供の好奇心に対して子供だましを言う必
要もないし、子供ながらに子供だましのことを言っ
て変に納得させる必要もない。とにかくお父さん
のお父さんがやってきたからやるんだよ。お父さん
がやってきたらお前もいずれやるんだよ。それでい
いんだと気づきました。これは自分なりにはとても大
きな発見でしてね。そうすると他の事も皆んなそれ
でいけるんだ。ちょっと大げさに言うと“一貫性”
が出来たんですね。

そうなんだ。「昔の手振り」親がやってきたこと
を「親の手振り」を子が真似て、それを子供にまた
伝えていく。これではなくては本当の“心”というの
は伝わらないのだな。親がやってきたことをやるん
だ。自分がやってきたからお前もいずれやるんだ
よ。それでいいんだっていうのに大きく自分に自信
のようなものを持ちまして、「親の手振り」そのま
まこう真似てくれればいいなあという思いを持ちな
がら、親から伝わってきた心のようなものが子供に、
親としての心がまた伝わっていけばいいなあと思
います。心を伝えるということはこういうことなんだ
なとようやく気づいたわけでありまして。こういうふ
うにして今までずっと何百年、何千年と伝わって
きたんだろうなと思います。そんなことを思いますと
日本人が遠く祖先の代からこうやって伝わって
きたことが長く生活の実際の営みの中で守られて
きたこと、伝えられてきたことが次の世代に受け
継がれていく。何かひとつエッセンスを得たよ
うな気持ちになれました。

2. 江戸時代まで、明治になる前まで、

日本は神仏習合

祠に向かって、柏手を打つのか、お経=お念仏か、
いちいち窮屈に区別しない。

お寺にお稲荷さんの鳥居。神社に五重塔。不思議
だが、神仏を混同してはいない。

この風習が、明治時代になるまで続いた。

明治の始めの王政復古の大本令のなかで、神仏
分離・廃仏毀釈というお触れが出た。

そんな中で、神社のこと、あるいはお寺のこと、
色々ずっと周りを見てみますと気づくことが沢山

ありました。伊賀八幡宮の境内の中をずっと見渡
しますと、いわゆる今の感覚でおかしなことが沢
山ある。じゃあ日本中どうだろうと。同じ境内
の中に神さまと仏さまが同居しているというこ
とも結構ある。これは考えてみたらずっと親が
子へ、子から孫へ、その心がずっと支えてきた
ことなんだなということに気づいたわけであり
ます。

神社の中に御堂があり、お寺の中に鳥居があ
る。親が手を合わしてるから一緒に真似る。道
を歩いてお地蔵さんがいらっしゃる。お地蔵
さんに手を合わせる姿を子供に見せておいて、
子供に見せることで、子供がその手を合わ
せるほんの一瞬の刹那でも、ちょっとは子供
なりに無邪気そのものになって、邪気のない
本当に清らかな気持ちになってくれるのか
な。ずっと辿っていくと結局日本人が大事に
してきたことは、神さんだろうが仏さんら
うが手を合わせるということ。それを、いや
神さまと仏さまが同居してる。ごちゃご
ちゃだなどと色々言われるかもしれない
けれども、でもそれは神仏習合の時代が
長かったという話になるわけですね。

神仏習合とは祠に向かって柏手を打つのか、
お経や念仏を唱えるのか、いちいち窮屈に
区別しない。お寺にお稲荷さんの鳥居があ
っても、神社に五重塔があっても、それが
世界遺産になっても別に間違っていると思
わない。日光東照宮がそうですね。これ
は日本人の感覚だと言われればまさに日
本人の感覚です。そういう中で神仏習合。
実際に神仏習合自体は図書館に行けば
分厚い本がいくらでもありますから、それ
はそれで勉強してもらえば結構なんです
けれども。伊賀八幡宮のこと、そしてひ
いては岡崎学に繋がる話の中で、要は日
本人が大事にしてきたことの中で神
仏習合を考え、この神仏習合の名残とい
うものを伊賀八幡宮の中に見てみましょ
う。

3. 伊賀八幡宮における神仏習合の名残り

神仏習合というのは、この風習は江戸時代
まで続きました。明治の初め、正確には
明治の元号になる前、慶応年間だった
と思いますけれども、明治の御代になる
直前。王政復古の大本令の中で、廃
仏毀釈・神仏分離というお触れが出
まして、分けろという話がきたんです
ね。日本人の生活に密着した神
仏習合、長い歴史を断絶するがごと
く、分けてしまえというお触れな
わけですから、その時の人達が色々
と本当に戸惑われたらと思うます。

伊賀八幡宮の中においてもごく自然に
神仏習合を背景に営まれてきた信仰の
日々、時の神主さんやあるいは周り
の方々の中でお触れが出て、色々
と模索されたことが沢山あるん
だろうなと思います。辛

うじて伊賀八幡宮の中でその名残というものを見てみましょうということで、絵図などを見ていただきますと今ある状態、あるいは昔はあったけれども今はなくなったということになるかと思います。

①巽の鐘楼

明治四年に幡豆郡の吉良吉田の西福寺に移築された。

神様から見て巽、つまり南東の方角ですね。本殿から見て、絵図では右下ですね。方角では東南の方角にあるもの、これは鐘楼なんですよ。伊賀八幡宮にもこの鐘楼がありましたが、この絵図で見ると立派だなと思うんですけども、廃仏毀釈のお触れが



伊賀八幡宮古絵図

出たものですから、明治4年になって、幡豆郡の吉良吉田の西福寺というお寺に移されました。ここにあれば他の御社殿と同じように昭和8年の国宝に指定されてたのでしょうか。明治4年にもう場所が移しているものですから、県の文化財として今も愛知県文化財として指定を受けてありますから、西福寺さんの管理だけじゃなく、県の文化財としての管理も行き届いているということで、安心しておるわけです。今は鐘楼は瓦葺きになっておりますけれども、ここにあった時は檜皮葺だろうかと思います。

②参道の真ん中の金灯笼

奈良東大寺の大仏殿の真ん前に金灯笼。唐招提寺の金堂の真ん前には石灯笼。

参道の真ん中にあるというのはまたこれ意味があるんですね。拝殿の真ん前に灯笼があります。真ん中にそういうものを据えるというのは、有名なのは奈良の東大寺。あの世界最大の木造建築ですかね。奈良の東大寺の大仏殿の真ん前に立派な大きな金灯笼があります。唐招提寺の前にもありますね。大仏殿の場合は金灯笼で、唐招提寺の場合は石灯笼です。

要は真ん前に置くこと。多分これは昔の人達の感覚で、真ん中にそういうものを置いて、人間が真ん中を避けるようにということだと私は思います。真ん中を歩くというのは遠慮する。なぜ遠慮するかといたら、これは神様・仏様に対して真ん中を避ける。それを形として示したのだと思うんですね。神社は、対・ペアが多いんですけども、仏様はこういうふうな灯笼を据えたり、あるいはお香を焚く、線香を焚く、その台を据えたりしまして、要は真ん前にどんと置く形がお寺に多いと思います。これが伊賀八幡宮にもあるということは、ひとつの神仏習合の名残かなと思っております。

絵図にもありますけれども、先の大戦の時に供出されてまして、後、地元の方の方が再建くださりまして今もあります。真ん中に立ってお参りするのはやっぱりはばかり。だからちょっと脇に立ってお参りする。当然金灯笼から外れるわけですから、ちゃんと正面の拝殿が見えるわけですね。昔の人達というのはそういう形にしてそれを示してきたんだろうなと思うんです。

③随神さまと随神門

山門(三門)・楼門と、仁王門・随神門と、格式を表す。関ヶ原の南宮大社-岡崎の伊賀八幡宮-静岡の久能山の東照宮-鎌倉の鶴岡八幡宮-香取神宮-鹿島神宮

お寺では山門とかあるいは仁王門と言います。神

社では楼門とか随神門とかいいます。中に仁王様あるいは随神様がいらっしゃるれば仁王門、随神門だし、いらっしやらなければ只の山門あるいは楼門と言うことであります。山門(三門)・楼門、それから仁王門、随神門とそれぞれ格式を表す。神社で例えて言えば、神社の中の境内の聖なる地域と、それから外の間の結界を表す鳥居。鳥居だけでもあればこれが神社の目印になる、地図の記号になるぐらいですからね。だけどその鳥居だけでなく伊賀八幡宮には門がある。この辺ですと六所神社さんも門がありますよね。門があるというだけで既に格式を表す。お寺さんでもそうですよね、山門がある。どこのお寺でも皆んな山門があるわけではないですからね。山門がある。楼門がある。只の門構えじゃなくて、楼閣の門があるということですね。大きい、小さい、色々表現の違いもありますが、昔の人はそれによって格式を表したということでございます。楼閣の門を作って楼門にした。そこにお寺だったら仁王さんを据えれば仁王門。神社だったら随神さんを据えれば随神門になるということです。

仁王さんを見て、仁王さんって誰ですか？
仁王さんは仁王さんです。同じように随神さんも随神さんって誰ですか、といわれたら、広辞苑を調べてください。随神さんは随神さんです。要は神社やお寺の境内の守り神様であります。守り神様がいらっしやるかいらっしやらないかということで格式が表れてるということなんですけれども、伊賀八幡宮にはこの随神門があつて、しかも随神様がいらっしやる。ここに書きましたように関ヶ原の南宮大社、岡崎の伊賀八幡宮、久能山東照宮と行って、鎌倉の鶴岡八幡宮まで行かないとないです。そこから向こうはと言ったら、江戸は皆さんご存知の通り江戸時

代しよっちゅう火事があつたものですからね、文化財という形で残るのは大変だったんでしょうね。江戸時代の火事もさることながら空襲で燃やされたという点もありましょう。結局江戸、東京を過ぎますと、後はもう有名な鹿島神宮、香取神宮ですね。文化財として昔からある。従って文化財級の随神門、随神さんといったらもうないんですよ。

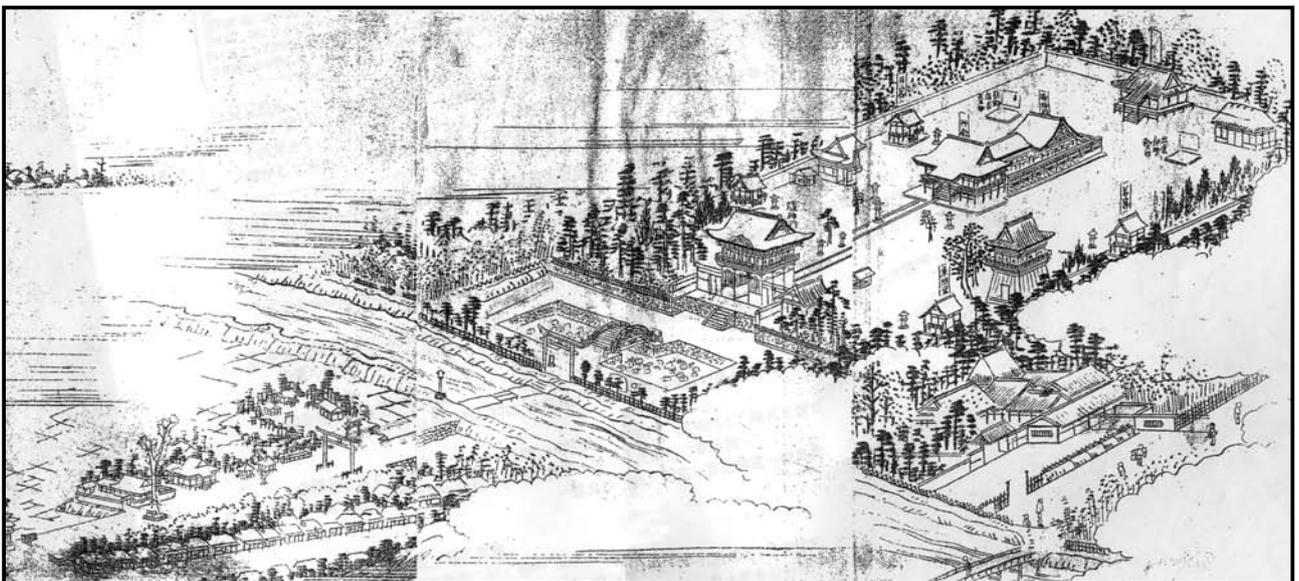
昨日今日の随神さんは今のご時世ですからお金を出せばいくらでも作れるんですけども、昔からある、つまり格式を表す意味としての随神さん、随神門があつたというのは、関ヶ原の南宮大社から岡崎の伊賀八幡宮、そして久能山と鎌倉。それぐらい、皆さんの町、岡崎は、やっぱり家康さんが生まれた町だなど。こういう門を構える神社があるということで、改めて岡崎を自慢する根拠のひとつに加えていただければと思います。昔から形としてそれがちゃんと残っている。そして有り難いことに明治維新とかあるいは先の大戦で燃やされることなく、寛永13年のままでずっと残っている。そういうものがある。格式を表す時代からのものがちゃんとあるという。さすが岡崎だなど言ってもらえるものだと思います。

④極楽の象徴の花：蓮と蓮池

極楽浄土・西方浄土に咲く花＝蓮が咲く蓮池

池がきれいな緑の葉に覆われるのは、せいぜい五月～九月の5ヶ月の間だけ。その5ヶ月の内、花がいっぱい咲くのは夏七月の前後、およそ50日間ぐらい。

あとの300日は、秋・冬・春のほとんどは、“泥”の池。宝珠のような、福よかに膨らんだ蕾が、ニョキニョキと…。やがて綺麗な蓮の花が咲き誇り極楽を想起。



伊賀八幡宮(貫河堂筆)

これはもう神仏習合そのものだと思いますね。極楽浄土・西方浄土に咲く花と言われる蓮。この蓮が咲く蓮池。お寺の本堂、その本尊様の足下で金箔に綺麗に施した蓮の花と大きな葉。香典袋も蓮が書いてありますよね。極楽浄土・西方浄土に咲く花。1年のうちで、蓮の池が綺麗な緑の葉に覆われるのは、せいぜい5月から9月の5ヵ月間だけです。写真1枚づつ皆さん方にお配りしました。今年の夏の写真でございます。綺麗でしょう。地元の氏子総代さん達が試行錯誤して下さいますね、立派に復活して下さいました。咲くのはここに書いてある通り5ヵ月くらいなんです。でも今はどうだ！ 今日来てくださる時に見て下さいましたか？ 汚い池でしょう。5ヵ月のうち花がいっぱい咲くのは夏7月の前後、およそ50日間だけです。あと300日は秋・冬・春のほとんどは、泥の池なんです。泥の水を吸ってこんな綺麗な花が咲くんです。どうしてここにこの蓮が咲いてるか、この話はあとでさせていただくんですけれども、蓮という極楽浄土の象徴の花が、その池が伊賀八幡宮にあるというのは、これはもう神仏習合の名残だと思います。

宝珠のような福よかに膨らんだ蕾、ニョキニョキと出てきてやがて綺麗な蓮の花が咲き誇る。とにかく蓮の池が泥の池だということを今まさに皆さんに見ていただいて、これが季節さえ叶えば写真のような時になるんだ。昔の人が感性として、感覚として、この蓮の花に対して極楽に咲く花というものを感じられたんだろうというのは、対比をして見ますと、ああなるほどなと私は思うんです。泥の池を見て、これが極楽で咲く花の意味かと。きっとその意味するところを感じていただけたと思います。

⑤「菩薩さま」「権現さま」という御神号

南無八幡大菩薩：源氏の守護神

権現：化身、生まれ変わり。↔明神

天地自然に深い畏敬の念を持つ我々日本人の宗教観→“人”をも神として祀る

④慰霊と鎮魂。 ⑤顕彰と誉れ。

→神業を以て家康公が神として祀られる(権現)

伊賀八幡宮には後陽成天皇様が書かれた「八幡大菩薩」という立派な軸がございます。勿論これは家康公が後陽成天皇様に書いてもらって家康様が奉納されたことでありますけれどもね。八幡大菩薩。菩薩、羅漢、色々ずっとあるというのは仏様の世界で色々言われていますが、誰が聞いても菩薩というのは仏教的な表現だということは分かりますね。

それから東照大権現の“権現”。権現様と言ったら、熊野権現とか蔵王権現、箱根権現、伊豆権現と、権



後陽成天皇宸筆

現ってあちこち沢山ありますけれどもね。その辺はみんな特定の人を祀った権現様じゃないんですけれども、伊賀八幡宮で祀られている東照大権現は言うまでもなく家康様のことですね。家康様が亡くなられて、権現号を用いるか、明神号を用いるかで天海和尚や梵舜さんや皆さんが色々協議された。要は権現様になったわけですね。明神さんといえば稲荷大明神とか、豊臣秀吉さんは豊国大明神ですね。“明神”というのか“権現”というのか、どちらも神として祀ったことを前提に言うんですけれども、“権現”

は化身という言い方の神さんの言い方と言われております。「八幡大菩薩」「東照大権現」というのは神仏習合の名残のことだと思います。

天地自然に深い畏敬の念を持つ我々日本人の宗教観。西洋の人達は我々日本人は曖昧だな、いい加減だなんて言われますけれども、それを育んだ風土が違うわけですからね。日本人はやっぱりこの島国という限られた環境の中で、そして、豊かな恵まれた自然を持って、その中で日本人が天地自然に深い畏敬の念を持って育ってきた、営んできた。長い長い年月、それで営んできた。この天地自然に対する畏敬の念というのは、日本人の慎み深さと表裏一体を成すと思うんです。なにせ天照大御神様自身が自ら汗水垂らして働いてらっしゃったんですからね。天照大御神様自身が自ら率先して働くことを良しとされてた。日本人がとにかく働くことを美德としてきたのは、もうその1点からも十分表現されるわけでありませぬけれども。その働くことについて、安心して働くことについて、自分達が汗水垂らした分だけちゃんとお恵みがいただけるという安心した中で、きっと醸し出されてきたことだと思うんです。豊かな自然に恵まれ、そして力を合わせて営めば、必ずその恩恵がいただけるという安定した安心した環境の中で、営々と長く続いてきた中で自然と、自分自身に対する慎み、そして天地自然に対する感謝の気持ち、これが結果として神さんだ、仏さんだ、いちいち別に分けなくても、とにかく手を合わせる。感謝の気持ちを述べる。そんな中でずっと営んできたことだと思うんです。そういう中で天地自然に対する手を合わせる気持ち、それを自ずと天地自然だけじゃなくて、人に対しても手を合わせるようになった。素直に感謝の気持ちの中で、人をも手を合わせるようになったということは良いことだなと思いますね。

日本人が大事にしてきたことは2つですね。その1は慰霊と鎮魂。洪水とか津波とか天災とかに遭ったり、あるいは工事の途中で事故に遭って亡くなったり、そうした人達を人柱として祀る。慰霊をし鎮魂をし、身代わりとなって死んでくれた。その思いを持って工事を進める。あるいは天災に遭ってその気持ちを慰めて、何とかその天災から逃れた自分達が、その人達のみで頑張る生きていこう。その気持ちをひとつの形で表わそうと慰霊碑を建てたり、あるいはその慰霊の祠を建てて手を合わせて、そうした慰霊と鎮魂という場合にも人に手を合わせました。

2つめは顕彰と譽れ。言うまでもなく、やっぱりなにがしかとてつもないことをやった人に対して、

その功績を讃え、あやかりたいなという気持ちで顕彰し、そしてその譽れを讃えて祭り上げてそして手を合わせる。天地自然の次に人に対して手を合わせるようになったということを言った場合、大体この2つで括ればよいかなと思うんです。

そこで特に顕彰の方です。当然これは東照大権現の話になるわけです。私が子供の頃は何々の神様なんて…。有名なのは松下幸之助でしょう。大概皆さん共通認識ですよ。経営の神様=松下幸之助。どっかの大学の先生よりも松下幸之助の方が経営の神様だなんて言ったもんですよ。先日も、中日新聞に載ってましたよね。手塚治虫さんのことを漫画の神様というそうすね。この頃はあまり何々の神様という言い方しなくなりましたね。神様という程のレベルまで達してないのかなと。“達人”呼ばわりするのが精々なんでしょうか。天地自然に深い畏敬の念を持つ我々日本人の宗教観。それがいずれ人をも祀るようになって、人の祀り方については慰霊と鎮魂、あるいは顕彰と譽れをあやかることで、人を祀るようになったと。

さあ家康さんは神様として祀るについて皆さんどう思われますか。慰霊と鎮魂ではないですよ。やっぱり顕彰と譽れだと思いますね。神業を以て家康公が神として祀られる。戦国時代のあの長く続いた血で血を洗う戦国時代を武の力で以て止めた、終始した。そしてその戦国時代の倍近い260年という泰平の、その大きな今でいうシステム、その礎を設計した。もう文治の力。この業を昔の人達は当然これは神業だと。人間業じゃない、ということで神様として祀ることについては、私はやっぱり十分その値打ちがあると思います。岡崎の生んだ家康様が、生まれてからなされてきたことをずっと思うと、本当に十分神様として祀られて良いんじゃないかなと、皆さんもそう思いませんか。ある意味もう人間とは思えませぬよね。人質にたらい回しにされたこと。自分の跡取り息子を織田信長から殺めろと言われて、泣く泣く跡取りさんが自ら命を絶って、そうまでしてでも織田信長に忠誠を尽くして、耐えに耐えて。『東照公御遺訓』にある「堪忍は無事長久の基」。堪忍、堪忍の連続。よくもあそこまで堪忍が出来るものだなと思いますね。織田信長さんの気性の荒さはむしろ人間らしいですね。豊臣秀吉さんなんか、秀頼を頼むぞ頼むぞと言って死んでいく。もう親が子を思う気持ちそのもの。本当に人間臭くてしょうがないですね。それを思うと本当に家康さんは、本当にこの人は人間かしらと思うぐらい、悪く言えば冷徹、だけどそれを本当に忍んで忍んで忍び通したんだなと思うと、凄いなと思いますね。余程の意識と信念

がないとやれるもんじゃないと思いますね。そのようなことを思いますと、家康様を神として祀るに相応しいな、当然だなあ、なんて思います。

昔の人達がずっと長く私たちに伝えてくれたことを思いますと、神仏習合という、とにかく神様・仏様を同じように手を合わせたと私は表現しますけれども、ただ念押ししておきたいことは、昔の人達は神仏は習合していたけれども、神仏をぐちゃぐちゃに混同はしてなかったということは言えると思います。神様は神様、仏様は仏様。だから神・仏という言葉はちゃんと残ってるんですね。それぞれ力は違うということはしっかりと区別されていた。

例えば神通力とは言いますが、仏通力とは言いませんからね。神業と言いますが、仏業ということはない。神罰が下るとは言いますが、仏罰が下るなどという言葉ありません。仏の顔も三度まで。仏様はとにかく慈悲で慈悲で、慈悲で以て慈悲をかけるわけですから、仏様が怒って罰なんか与えたら仏様でなくなってしまいますね。仏はほっとけ神構うななんて言ったところで神様は神様、仏様は仏様、ちゃんと区別されてる。これが大事なことだと思います。

神様にも仏様にも手を合わせる対象として手を合わせた。それがずっと親が子に、子が孫にずっと伝えてきた。それは何かというやっぱ自然な人間の感情として、そして自分の慎み深さの反映としてずっと繋がってきたんだろうと思います。それが伊賀八幡宮の境内の中でも、今も名残として残っているんだろうと思います。

4. 伊賀八幡宮においての、

★松平四代親忠公のメッセージ

文明二年(1470)、氏神として伊賀八幡宮を創建、文明七年(1475)、氏神(=菩提寺)として大樹寺→岡崎に地歩を堅めて本拠とし、松平の山里には引っ込まない！！

神様として祀り上げるに足る、神様の業だと思いうに十分の偉業を残された家康様なんですけれども、御祭神、家康様と伊賀八幡宮の関係について述べたいと思います。

その家康様の関係を見るとどうしても八代にわたるご先祖様、松平のご先祖様との関係からみていかなければならないと思います。皆さんもご存知の通り現在の豊田市、あの松平の郷、あの山里に行かれたことはありますか。六所山の麓の、まあ麓というにはまだまだ山の中の、あの豊田の山里の中での野武士の集団だと言っているいいかもしれません。その集

団がこの三河、山からずっと下りてきて、三河平野、この岡崎の辺りで何とか地歩を堅めて、本拠とする。何とかやってけるかなという自信を持ち始めたのが、多分四代親忠公の頃だと思えます。四代親忠公がその岡崎に地歩を堅めて本拠とし、もう松平の山里には引っ込みはしないぞと。胸に思っている思いをどういう形で示そうかと。今でいうメッセージとして表したのが、まさに伊賀八幡宮の御創建そのものだと私は思えます。そして5年後に氏寺として、菩提寺として大樹寺を建てられた。これ自体がもう親忠公の、先祖に対し、また子孫に対する大きなメッセージだったと私は思いますね。

5. 伊賀八幡宮においての、

★松平九代家康公のメッセージ

……厭離穢土への思い！！

氏寺として、芝増上寺に加えて、上野に東叡山寛永寺を創建。

氏神としては、自らが、久能山と日光の靈廟に鎮まり、幕府を守護。

父も、祖父も、家臣の刃にかかり命を落とす、という下剋上。

駿河の大守：今川義元が、尾張の織田ごときに討ち取られる、という衝撃。

それから、五代後の家康公。家康公についてはメッセージと呼べるものは沢山ありますから、その沢山ある中でちょうど四代親忠さんに合わせた言い方で表現するならばということで、家康公はどうされたかということ、氏寺として江戸の芝増上寺に加えて、上野に東叡山寛永寺を創建。それから氏神としては自らが久能山、日光に鎮まっている。幕府を守護した。これが最たる家康様のメッセージであろうかと思えます。けれども、それではちょっと伊賀八幡宮との関係になりませんから、伊賀八幡宮との関係、家康さんのことを考えてみると何だということを見ますと、家康さんの生まれ故郷としての岡崎という点から自ずと分かってくることだろうと思えます。

即ち四代親忠公の頃から四代生き延びて自分が五代目で生まれてきた。でもまだまだ松平家は弱小の武士団だったと思えます。有名な話が人質のたらい回しですね。しかし私はその弱小だった、という典型として挙げるのは、やはりここに書きましたように父も祖父も家臣の刃にかかって命を落としたという“下剋上”。駿河の太守、今川義元が尾張の織田ごときに討ち取られるなんて、そんな有り得ないようなことが起こった。このショック。“厭離穢土への思い”と書きましたけれども、私は家康公にとってはこの世の中

は何だ！と。地獄だ！と。穢土の連続だと。その思いというのは本当に凄かっただろうなと思います。

①伊賀八幡宮の本殿の真北、約1.5kmには何が？

……先祖への思い！！

現社殿は、本殿・幣殿・拝殿が上空から「エ」の字に見える、権現造り。

その本殿の真っ直ぐ北の方角に、松平初代～八代の霊廟（＝お墓）がある。

伊賀八幡宮は現社殿、本殿・幣殿・拝殿が上空から見ると「エ」の字に見える権現造りなんです。昭和8年に国宝に指定された現在の御社殿。これは家光様が造営なさったということになっておりますが、実はその中の本殿は家康様が慶長年間に御造営なさった本殿なんです。

正面から見まして本殿の上に北極星がありまして、その北極星の下、1.5km先に何かがあるか？江戸から北極星の下に日光があるのは皆さん有名な話ですよ。当時の昔の人達はその南北の関係で北には先祖の御霊が、守り神が鎮まっているという思想が強かったんです。だから北極星の下というのはとても意味がある。伊賀八幡宮、慶長年間に家康様が御造営なさった本殿。その本殿のずっと行く先、北極星の下、距離にして1.5km弱ですけどもね。何かがあるか。それは、松平初代から八代の霊廟があるんです。こだわったことを言えば大樹寺さんの本堂ではないのです。今は大樹寺さんのお寺の中にあるところの、我が先祖の八代の霊廟がある。これは距離にすればわずか30mの差ですけども、1.5kmという距離も短いものですから、この30mの違いというのは大きいなと私は思います。

大樹寺さんの本堂を真北に置くんじゃなくて、お墓を真北に置いた。そういう位置関係というのが私は先祖に対する思い、自分がここで何とか生きながらえてきた。人質にたらい回しにされてきたけれど、今ここで何とかある。これは色んな思いが込められて、私はこの本殿造営についてそういう位置関係を作られたんだろうなと私は思っています。

6. 伊賀八幡宮においての、

★三代將軍家光公のメッセージ

①昭和八年に国宝に指定された現社殿は、寛永十三年に完成……祖父への思い！！

幕藩体制を確立し、莫大な富を背景に家光公は、父秀忠公が造営した日光を全て建て替え再建。それに対して、祖父家康公が造営した伊賀八幡宮の現本殿を増築する形で権現造りにし（日光東照宮再建と同じ年）、併せて東照宮を奉祀。

お祖父さんの家康様が亡くなられて、お父さんの秀忠公が家康様の為に東照宮を造るんですね。久能山に最初造るんですが、その後日光にも造るんです。日光に造った秀忠様のお社、その子供の家光様は皆んな造り替えてしまうんです。皆んな壊してしまい、壊したものでどうしたんか？ といったら、群馬県世良田というところへ移して世良田八幡宮。新田氏の流れを汲む徳川の元々の郷の世良田に八幡宮という神社がありますね。そこに御社殿を移したというふうに言われております。そういうのを取り払いみんな造り替えて現在の日光東照宮になさった。

ところが岡崎で家康様が造った伊賀八幡宮のご本殿はそのまま残しておいた。幕藩体制を確立して、莫大な富を背景にした家光様が、本殿を造る金がなかったと私は思いません。本殿を造る金がなかったのではなくて、これはお祖父さんが造ったんだからこれは壊すなと。これは家光様のメッセージだと思っております。日光東照宮は皆んな造り替えてしまったけれども、お祖父さんが造った本殿は残して、それに増築する形で造れと。それで寛永13年に完成した日光東照宮と同じ年に伊賀八幡宮の権現造りの改築も終わる。時同じくしてが意味があるかどうか、これも不思議なことだけれども家光様のメッセージだと思っております。

②伊賀八幡宮の蓮池＝伊賀八幡宮に蓮の花が咲く意味

……欣求浄土への思い！！

蓮で覆い尽くす＝厭離穢土欣求浄土を、伊賀八幡宮の境内において展開するぞ！！

「場所」において、穢土を浄土に……井田ヶ原の古戦場。

多くの血が流れ、命を落とした武者の無念の魂が漂う、忌まわしい場所。

松平家・徳川家の守護神の力で、地中深く押し鎮め、地上を蓮で覆う。

「時」において、穢土を浄土に……応仁の乱以来の、戦国時代の終止。

私利私欲に溢れた戦乱の世＝下剋上の世の中を、平和＝秩序ある世の中に。

場所においても、時においても、穢土にまみれたこの日本を浄土に転化させる。

穢土を浄土に転化させるぞ！ は、家康公以来の悲願。

→伊賀八幡宮＝家康公＝家光公。三者が共通の目的で、一致！！

→江戸（そして日本）は、260年かけて清められ、東京に改名された！！

これが一番の今日のメインです。これはまさに“欣

求浄土への思い”そのものだ。家光様のメッセージだと思います。蓮の大輪で、西方浄土の象徴とされる蓮で覆い尽くす。これは何かといたら、「厭離穢土欣求浄土」を伊賀八幡宮の境内ひとところに置いて展開するぞという、まさに形としてそれを見せた。私はそう思っております。

この厭離穢土と欣求浄土というものを私は“場所”と“時”とふたつにおいて捉えなくてはいけないと思います。“場所”において穢土を浄土にする。伊賀八幡宮と大樹寺の中間点、鴨田の手前のところですね、井田ヶ原の古戦場があるわけです。合戦の中武者が出て来て、ピンと1本の白矢を放ったら、味方が勢いついて劣勢を挽回して、織田勢を駆逐したという逸話が残っている井田ヶ原の古戦場。岡崎では小豆坂の古戦場と並んで有名な古戦場だと思います。その古戦場を背にして、あるということ、言い換えればこの辺りは沢山の、その当時の兵者の無念の血が流れている土地だということですね。多くの血が流れ、命を落とした武者の無念の魂。哀れで悲しい魂が漂う合戦の跡地、忌まわしい場所、多くの命やその魂がここで漂っている。下剋上の世の中でなにかの思いを持って臨み、その思いが望みがついてここで命を落とす。どんな悔しい思いでここで命を落とされたのかな。それがひとりやふたりじゃない、沢山の人が首塚として祀られているぐらい沢山の命がここで落とされた。命を落とされとるということは無念の血が、無念の魂がそこに漂っている。その魂をぐっと伊賀八幡宮の神様の力で、不埒に飛び回ることなく、ぐっと押さえ込む。この場所として全く相応しい、まさに徳川家の守護の神様の力で、漂う怨念の魂にならないように、鎮まり所を求めているこの魂を地中深く押し鎮め、そしてその地上を極楽浄土の蓮で覆う。まさに厭離穢土欣求浄土だと。

“時”においては、応仁の乱以来の戦国時代、この150年続いている戦乱の世、下剋上。家康様がショックの連続で過ごされた、この地獄の連続の時代を何とか止めなければならない。これを私利私欲に溢れた、溺れた戦乱の世を下剋上の世の中を、平和な、秩序ある世の中にしなければならない。寛永13年、まさに幕藩体制を確立し、もう戦国時代には戻さんぞ！ という思いを私はこの伊賀八幡宮ひとところにおいて、時代を画する“時”において、しっかりとそれを示された。私はこの伊賀八幡宮に対しての家光公のメッセージというものを、しっかりと感じる事が出来るわけでありませう。

穢土を浄土に転化させるぞ！ との家康公以来の悲願。神仏習合の習俗の中で、この伊賀八幡宮に極

楽の花で覆い尽くすということは、もう家康様以来の悲願なんだという中で、伊賀八幡宮の大神様の平和を願うお気持ち。そして家康公のこの世の地獄を何とか直さなければならない、という思い。そして家光様がしっかりとこれを元へ戻さないぞ！ という、三者の共通の目的がここで一致して、これを伊賀八幡宮に展開された。私は大きな決意表明を、この伊賀八幡宮で展開されたんだらうと思います。

だから伊賀八幡宮の蓮の花は何かしなければならぬ、と氏子総代さん達が、一生懸命あの手この手で伊賀八幡宮の蓮池に手を入れてくださって、そして地域の人達も、ザリガニを捕ったり亀を獲ったり色んなことをしてくださって、蓮の花がまた咲き乱れる綺麗な池に戻り、また境内も厭離穢土欣求浄土をしっかりとひとところ展開する場所となりました。

7. 江戸時代の再評価は、

家康公への再評価に繋がる

江戸時代は暗黒の封建時代とするレッテル、の刷り込み、封建主義の下で、民百姓は虐げられていた、という教育→現実には泰平の260年

江戸時代が暗黒の封建時代とするレッテル。封建時代と言ったら、とにかく悪いことだらけというイメージ。ちょっと言うと、やーい封建的だ！ とか、ちょっと古くさいことをやると封建的だ！ なんて言われていたものです。封建時代とはとにかく悪いこと、と刷り込まれていますけれども、家康様が築かれた江戸時代260年。結果としての260年。そんな封建時代が本当に暗黒時代ならば260年も続かないということは、誰が考えたって分かることだと思います。

260年も続いたということは意義深いです。現代まで受け継がれている文化（歌舞伎など）も江戸時代で生まれ、首都・江戸は34万人も超える人が暮らしていた。治安維持も見事に統制され、江戸は人々が住みよい都市であった…豊かな平和だったから、住みよかったから、260年も続いたんだということにしっかりと胸を張っていただいて、その江戸時代を築いた家康様。この人が岡崎で生まれ、前半生を本当に忍びに忍び、耐えに耐えて、そしてしっかりと力を蓄えたうえで、浜松にそして江戸に幕府を開き、この泰平の礎を築いたんだと。これを孫の家光様が祖父の家康公の思いを、しっかりと伊賀八幡宮において形として表現をしたんだと。

伊賀八幡宮の宮司としては、伊賀八幡宮のことをこの様に捉えておまして、今日喋らせていただきました。ご静聴ありがとうございました。